

く ら ふ と

県育協だより

発行 鳥取県子ども家庭育成協議会
鳥取県育協だより 第17号
平成25年3月

平成24年度を振り返って

鳥取県子ども家庭育成協議会
副会長 原崎保子

鳥取県子ども家庭育成協議会の皆様、毎日泣いたり、笑ったり、怒ったりしながら成長する子ども達からエネルギーをもらい、保育に頑張っていたいただきありがとうございます。

一年間の行事の中でも、運動会、発表会は、繰り返し積み上げて身に付けた力を、発揮できるチャンスだと思えます。その様子を見た親子さんから「泣かずにできた。」「一緒に踊れた。」「友だちの手を引いてあげた。」「ストーリーにそって演じた。」「など、喜びの声を聞く、本当に、この仕事をしていて良かったと感じ、明日からの活力となります。

今年、10月に第46回全国保育士会研究大会 鳥取大会が開催され、全国から1,066名の参加がありました。全国で一番小さい県でありながら、オープニングから分科会終了まで、地元園児の傘踊りや保育士のまじめで勤勉な良さを十分に知っていただけたと自負しています。

この大会の準備に、熊田副会長はじめ、実行委員の方、作業委員の方、そして当日は、東部の保育士さんを中心に県内の保育所(園)が一丸となって、無事終了することができました。

違いを生かし合う育ちと学び

鳥取県子ども家庭育成協議会

理事 福田泰雅

年末には選挙があり、子育てに関する情勢も変わってきました。国の方針を受けて地方でも試行錯誤しています。「子どもの最善の利益」のために、未来に悔いを残さないように活動していきたいものです。25年度は、役員の改選があります。県内のどこからも積極的に手が上がり、鳥取県子ども家庭育成協議会が発展していくように、皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

当たり前について考える

保育

以前、県外の保育園を視察する

機会があり、わりと広めの園庭から聞こえてくる子どもたちの声の聞こえ方が、自園での聞こえ方と違うことに気が付いた。その時間

帯3クラスが園庭で遊んでいたが、改めて園庭での遊び方を観察してみると、クラス単位で遊んでいたのだ。自園では外遊びの時、仮に3クラスが遊んでいたとしても、園庭のすべての場所からほとんど同じように聞こえてくる。しかしその園では園庭の中の全部の場所からではなく、子どもたちの声が3カ所からまとまりとして聞こえてくるのだった。

つまりその園では、外遊びについても保育士がコントロールしていたのである。自園では、外遊びは園庭の中の好きな場所、好きな活動を子ども自身が考えて遊んでいる。もちろん室内でのストレスを発散させるために自由に遊ばせているわけではない。外遊びでも自分で遊びを見つけようとする。このことだ。そのようにしていても、ほとんどの子どもたちは自分たちで仲間を集めて遊びを展開する。園庭中から声が聞こえてくるとい

うのは、遊びの中で学び発達してほしいという願いや保育上のねらいから環境設定し、自由に遊ぶことを重視してきた一つの表れである。

だから保育の形態の違いは、当面問題ではない。大切なことは、どのような理由があってもそのような形態で保育しているか考えることなのである。

当たり前前体操が流行っているが、当たり前前に注目し、観察し、「なるほどそういうことか」と誰もが振り返ってみるところに面白さがある。人間は環境に順応する生きものであるから、当たり前前としてすべてを受け入れていく傾向がある。「〇〇は××である」「こうすればこうなる。」に慣れてしまうと、それ以外のことは考えなくなる。だからこそ、当たり前前から離

すべてについて多角的な視点を持つ

保育についての当たり前を見直すためには、前提として考えておくべき発達の視点が2点ある。一つ目は、子どもを含めた人の発達は、発達させるといっても、「環境から学び、自ら発達する」こと。二つ目は、「人は生活や遊びの中で楽しく発達する」ということである。

つまり、保育にあたる者は、環境という大きな枠を徹底して考え抜き、提供しなければならぬ。そしてその環境とは、子どもがそこで安全で快適に生活できることを前提とし、①発達の場である空間的・環境的構成、②人が自らモノゴトと向き合い内省するために必要な発達の構成する人的な環境に配慮することが求められるのである。

それらの環境の中で、生活や遊びを通じて「外界に働きかけ、感じ取り、仮説を立て予測し、語り合ってさらに考え、検証し、知識や技術を身に付ける」などを繰り返し、以前習得したものに修正を加えながら発達する。これら生き残るために必要な能力獲得を面白い、楽しいと感じるようにインプットされている。一生涯発達していくための基礎である乳幼児期に必要な「心情、意欲、態度」は、このようにして身に付けていくのである。決して、すぐに忘れ去られる類の薄っぺらで安易な知識習得や就学前に慌てて取り組ませて身につけさせようとする学びの態度ではないのである。

この様に子どもにまつわる様々なモノゴトに対して再度の検証が必要なのであるが、最も大切なことは、「子どもとはどのような存在であるか」ということと、「今、目の前にいるこの子はどのような存在であるか」について考えることである。ほとんどの場合、子どもは「大人の小型、未熟な存在、何も知らない人、何もできない人」としか見られていない。子どもを見る視点が一つしかない場合、どうしてもその尺度だけで見てしまいう。例えば気になる子かそうでないかの視点ですべての子どもを見ようとする場合、気になる子かそうでないかの子どもを見ようとする。やっっている保育は間違いではないが、その子のありのままの姿から程遠いという点では、視点が圧倒的に不足である。

どちらかにしない生き方

科学は真理を追究し、100万回行っても同じ結果になることを求める。それは論理の世界である

日本全国の発祥の地である鳥取市で、全国の保育士が集い、平成24年10月18日(土)19日(日)文化会館において、「第46回全国保育士会研究大会」が開催されま

が、そればかりを求める世界にも限界がある。100万の正解を教え込まれようが新たな真理への道は開かれない。課題を見つけて追求することを知っていることは別の問題であり、想像力や創造力の問題なのである。

同じく真理を求めるものがある。それは芸術の世界だ。そこでは一つのモノゴトを100万通りの見方で見ようとする。そして想像し創造することが求められ、白黒を明確にすることはなく限りなく広がる色の世界に真実を見ようとするのである。

あいまいさをありのままに受け入れることの重要性を詩人キーツは、消極的受容と言った。真理追求のために私たちの世界は、どちらかではなく、違うことに豊かさを見出し、受容する必要がある。

乳幼児期の生活とは、他者との違いを通じて自分の豊かさに気づく生活でもある。言葉では、「みんな違ってみんな良い」と言っているが、それは保育で実践できているのだろうか?自分を生かし、他者も生かし合うそんな保育が求められている。それが「自分の幸福だけに終始する生き方の限界」を超えるために必要だ。

第46回全国保育士会研究大会 鳥取大会を終えて

感謝! 感謝!!

鳥取県子ども家庭育成協議会

副会長 熊田美智枝

テーマを『子どもが豊かに育つ 保育の実現〜輝け!子どもたちのちと笑顔〜』とし、一人ひとりの子どもの育ちを保障する制度・環

境構築やより質の高い保育実践のため、保育士等がその役割と使命を認識し、自己研鑽することを目的に開催されました。

北は北海道から、南は沖縄県の宮古島まで、全国各地から1、066名の参加者がありました。

大会一日目は、地元園児による「じゃんしゃん傘踊り」で始まり



続いて開会式では、開会宣言、物故者慰霊黙祷、倫理綱領唱和、また、鳥取県子ども家庭育み協会のコーラス隊による斉唱「私たちがいるんです」で、練習の成果が披露されました。主催者挨拶では、全国保育士会 上村初美会長、鳥



取県子ども家庭育み協会 大橋和久会長などの挨拶がありました。来賓の祝辞では、鳥取県知事 平井伸治氏がユーモアを交えてのお話で、会場が温かな雰囲気となり、平井知事の人柄がうかがわれました。引き続き、永年勤続保育士への感謝状贈呈2、131名の代表者として、鳥取県わかば保育園 森岡優子さんが登壇しました。最後に大会アピールとして、子どもの豊かな育ちを支えるためのアピール文が、全国保育士会 牧野多津子副会長により宣言されました。



その後、行政説明、上村初美会長による基調報告が行われました。

記念講演では、漫才師 宮川大助氏と娘さん、お弟子さんの三名のトークショー形式で行われました。ご自分の幼少期の先生との信頼関係を…。子どもは抱きしめられることで、どれ程安堵感を得るのか、自らの体験を交えながらお話ししてください。感銘するものがありました。最後に「笑顔以上の良薬はない。ぜひ笑顔で子どもたちを抱きしめてあげてください」と熱いメッセージをいただきました。

最後に次期開催県の岩手県よりゆるキャラのそばっちと共に次期大会のお誘いがありました。

大会二日目は、九つの分科会による「実践研究発表」が行われま



した。助言者を交えた質疑応答や参加者によるグループ討議などができました。

大会後に、「会場までの街道の歓迎フラッグに感動した」「オーブン色の園児がかわいかった」「オレンジ色のスタッフジャンパーの人の動きがよかった」「お弁当がとても美味しかった」「あったかなおもてなしの心を感じた」という嬉しい声も聞きました。

第46回全国保育士会研究大会の開催地が鳥取県と決まった二年前から、準備を進めてきました。全国で一歩小さな県でもあり、交通アクセスも悪く、千名以上の参加者が本場にあるのか、不安いっぱいの中、スタートしました。

理事を中心とした実行委員会、開催地となる鳥取市からメンバーを選出した作業委員会を結成し、旅行業者・記念講演講師・サブテーマの選定から始まりました。

鳥取県、鳥取市、とっとりコンベンションビューロー、事務局の皆様には大変お世話になりました。そして何よりも、前日準備から当日まで、それぞれの役員・係員の方々が責任をしっかりと持ち業務を遂行してくださいました。多くの方のご協力で、大きなトラブルもなく無事に終了することができ

ました。

大橋会長のもと、皆が一丸となってお陰で、全国の皆様にすばらしい大会だったと言っていたいただくことができました。

小さな県ではありますが、全国に鳥取の良さを発信できたのではないかと信じています。

今、保育制度が大きく変わろうとしています。こういったときだからこそ、会員が団結し鳥取県子ども家庭育み協会が、益々充実発展していくことを強く願っております。

1-1分科会 保育の内容を深める 「子どもの発達と環境 (3才未満児)」に参加して

白兔保育園 東田 晴江

第1-1分科会は、助言者としてお茶の水女子大学大学院准教授 青木紀久代氏のもと、発表①群馬県、担当保育士との愛着関係から見えてくるもの(一人ひとりに応じた保育支援による子どもの成長)と、発表②長崎県、生活リズムの乱れへの対応(ベビーマッサージ)がもたらす効果と効用(という発表をもとに、午後はグループ討議を行いました。

群馬県の発表①では、担当制保育は子どもが安心できるところにメリットはあるものの、その反面、担当保育士が不在の時落ち着かなかったり不安になったりする問題点があります。そのことをふまえて、保護者や保育士にアンケートをとり事例検討した結果や担当制の有効性についての報告、担当不在時や、進級時の課題に園で取り組んだ事についての発表でした。

助言者より、「緩やかな担当制をとることで、担当制と複数担任の双方の良さを取り入れることがで

きる。乳幼児期の発達過程を踏まえ、保護者や保育士同士が連携し、子どもと関われる環境作りが必要。」という話を聞きました。

また、長崎県の発表②では、不規則な生活習慣の影響が園生活の中でもみられる現状の中で取り組んだベビーマッサージの効果についての報告で、保護者への子育てに関するアンケートから、スキップの必要性を感じて、ベビーマッサージを保護者参観で実践し、保護者の思いと、子どもの不安定な感情についての関係性や、スキップの大切さを保護者に伝える園全体の取り組みについての発表でした。助言者より、「ベビーマッサージの年齢が適正であるか、発達の適時性をとらえられているかを評価していく必要がある。この取り組みで、保育者自身のメンタルもよくなっている。実践の見直しをしながら、子どもと保育者あるいは子どもと保護者の交流について、ベビーマッサージというコミュニケーション方法を保育現場から発信していく。」というお話でした。どんな取り組みにも一長一短ありますが、子どものためにチームで実践に取り組む素晴らしさを感じました。

1-2分科会 保育の内容を深める 「子どもの発達と環境 (3才以上児)」に参加して

渡保育所 藤川 智子

まず、研究1 一人ひとりの生命を大切に保育(誕生会の見直し)についてとして、第一光の子保育園(宮城県)の横尾千夏先生の報告を聞きました。誕生児を園全体でまとめて祝うのではなく、一人ひとりの誕生日の日に保護者を園に呼んで一緒にお祝いし、生

命の尊さや「子育ては一人ではできないこと」を知ってもらいたい、というものでした。

次に研究2 就学を見通した連続性のある保育(異年齢交流保育を通して)として、中原・高津地区保育士研究部会(神奈川県)の渡辺弘美先生・斎藤由紀子先生の報告を聞きました。川崎市の公立保育園で独自の保育指針を作成し、テーマに沿って研究を進めていくというものでした。

これらの報告を受けて、神戸松蔭女子学院教授の奥美佐子先生の助言をいただきました。

研究1では、園の中で何を大事にしていくのか、それをどう工夫すればいいのか、連続性の中にどう入れていくのかを考え、どこがその子の育ちに大切なのか見極めていくことが重要であるとのことでした。また、一人の子どもに焦点を当てて育ちの分析をしていくことも有効であると言われました。

研究2では、異年齢交流保育を通して、特に子どもたちのコミュニケーション能力や社会性の育ちを重視したものであり、川崎市が1つの基準を持って取り組むことから、多くの園が揃って取り組める利点があるとのことでした。その中で、発達と学びの連続性として、総合的な学びの中の窓口(領域)から何を今子どもたちが得ているのかを見極めることが重要であるとのことでした。それには、

◎一人ひとりの記録から次に何を目指していくのか(カンファレンス) ◎目標を持った計画的な保育 ◎保育者間の共通理解 ◎小1プロブレム・個と協働(個としか動けない子ではない)をポイントに挙げられました。

今回、全国の先生方の報告や助言・講評、グループ討議で得た多くの学びを自分のものとし、これ

からの保育に生かしていきたいと思えます。



第1-3分科会 保育の内容を深める 「気になる子、障害のある子への保育」に参加して

みやこ保育園 福田真知子

第1-3分科会では、
○気になる子どもが園生活を楽しむために
「心と体を目覚めさせる」「おはようタイム」を通して

奈良県宇陀市保育協議会 太田千佳子先生・山本千容先生の発表

○保育士のスキルアップ研修のあり方と連携
沖縄県宮古市保育研究会 瑞慶覧定代先生・砂川ルミ子先生の発表

助言者として、はあし子どものころクリニック副院長 帆足暁子先生を迎え行われました。
午前中は2つの発表を受け、活発に質疑応答・意見交換等行われました。子どもの姿を客観的にとらえ課題解決にむけどのような取り組みをしていくのか。「子どもを見る」という視点が自分の中にあるかどうか問われる。などの話

が出ました。午後はグループに分かれ話し合いを深めました。グループに分かれたことで具体的な意見も出やすく、それぞれの園の環境を活かした取り組み等について話を聞くことができました。また日ごろの悩みを出し合い、具体的にどう取り組んで行けばよいのか考え合うことができました。

助言者 帆足先生の言葉に、研修は受けて責任を持って報告すること、効果が大きいことは言うまでも無い。研修を受けた人が中心となるような実践をしていき共通理解を広げることが大切である。保育士には更新制度が無いため必死感が無いのかもしれないが、これからは更新制度もできるかもしれない。園内の研修を内容のあるものとするためには、信じ合える仲間の中で本音が出せる、専門性の低い姿を出しても責められることとの無い集団、たがいに高めあおうとする保育士集団を作っていくことが大切である。とされました。

保育内容を深め充実させるためには、保育士集団の資質向上が大きな課題であるが、子ども達の個性の育ち・集団としての育ちがそれぞれであるように、保育士集団も互に認め合い尊重しあえる仲間関係の中でこそ、育ち合うことができる。ということ再認識した分科会でした。



第2分科会 保育の計画及び評価を考える 「保育の計画」に参加して

のぞみ保育園 大呂ゆかり

まず、「保育の計画及び評価を考える」評価と保育の質の向上」をサブテーマに千葉県巻石堂さくら保育園、齋藤まり子園長先生から発表が行われました。この発表では、運動会を中心とした行事が子どもたちにとってどのような影響や効果があったのかを検証し、子どもの育ちを促す行事の在り方と保育士の資質向上につながる運営の在り方について考察されました。

次に行われた「乳児の個別計画と評価に関する考察」をサブテーマに保育の家しようなん 塩見奈々子先生の発表では乳児の保育の計画作成及び実践の評価を通して、その計画の妥当性と長時間保育における乳児の育ちについて検証されました。大半を過ごす保育園での生活を充実させるためには保育の計画、実践、評価、改善のPDCAサイクルを常に循環させていく必要があると報告されました。

午後からの研修では、会場を9グループに分け「子どもの育ちを保障する保育の質とは何か？」の問いでKJ法を活用し、活発な意見交換が繰り返されました。一人一人が保育を振り返りながら、語り合う姿は保育士としての誇り、輝きを感じました。
最後に神戸松蔭女子学院大学大学院 寺見陽子教授より、「保育の創造と計画、評価」の講評をいただきました。

計画が子どもの育ちや保護者のニーズに並び、子どもの育ちを見据えた関わり、援助、環境構成がなされたか、保育のねらいが達成されたか、保育の質に関する観点

から考えることが大切です。また、保育をデザインし、モニタリングして改善を図っていく仕組みを職員との連携をとりながらどのように作っていったか、その過程でみいだされたノウハウが保育を機能的に運営する手立てとして、職員間で共有され保育の質の向上を図るシステムとしてどのように機能したかという観点が大切となります。

第3分科会 健康及び安全を考える 「食育及び健康・安全」に参加して

米子市西保育園 足立 恵子

第3分科会では「健康及び安全を考える」と題して2園の発表がありました。三重県いなべ市立員弁西保育園は「心と身体を育てる食」について29年間の家族の実態調査結果の分析をしました。生活習慣の乱れ、夜型生活への問題が示され、子どもの描画表現から家族の関わりや食育活動の前後の家庭の関わりの変化をとらえていました。

食が身体をつくり、心の豊かさや感謝につながる痛感するなか、家庭生活の時間は夜型になり体調管理についての思いが希薄になり食の面だけでなく躰やおむつ外し等子育てすべてに養育力が乏しくなってきた園への依存度も高くなってきたという報告でした。聖徳大学前教授の室田洋子先生から食育を柱とするこれらの切り口の中から家族の実態調査の分析と子どもがとらえた家族内人間関係の質的内容についての分析を行い、さらに事例を通じ子どもの生活実態を掘

り下げることが加えており、実践研究の新しい切り口として高く評価されると講評をいただきました。
福岡県小百合保育園は「保護者に寄り添う給食室を目指して」子ども達の喫食状況や反応を直接把握する為に、調理員も2歳児5歳児を中心に各クラスを回って、一緒に食事をしたり信頼関係を深め、手作りの存在を身近に感じてもらうようにしていました。しかし保護者や職員間でも子どもに望む姿に意識のズレがあり食生活実態調査をしてエピソードをとり、気になる子どもの姿を追うという報告でした。室田洋子先生から保護者が変わった、子どもが変化したということを感じや印象ではなく統計的に踏み込んで結果を表わしたところが質の高い研究となつたと講評をいただきました。

最後に食育の取り組みについてグループ毎に地域の特徴を活かした「食」に関わる意見交換をし職員の連携や保護者と共に考えていく大切さを話し合いました。



第4-1分科会 保護者に対する支援を考える「保育所における保護者支援」に参加して

久松保育園 富吉由美子

第4-1分科会の午前は広島市

の青崎保育園と、福岡市の主任保育士研究会の発表が行われ、助言者に今井 和子先生をお迎えし、先生の体験談も交えながら、研究会が進みました。不況で家庭状況が圧迫されている今の世の中、父母のストレスは多く、子育ても伝承されていない。子育てが楽しめない保護者の悩みをどれだけ理解できるか。子どもの育ちを保護者と共有し合い、保護者と子どもとの関係形成をしていくことが大切であると話されました。少ない時間の中一日の様子を伝えようとすると、出来事だけを伝えがちになつてしまいがちですが、保護者が子どもの成長を感じ、育児が楽しめるように子どもの育ちを伝えていくことが大切であると改めて考えさせられました。
午後は今井先生より討議の柱を2つ提示され、グループディスカッションが行われました。①「保護者に保育をどう伝えるか」日頃からの信頼関係をどう築くか」では疑問に思ったことを言ってくるのが苦情なので、相手の言っていることを反復し共感していくことが大切である。そして、遊びを通してどんな学びの芽が育っているのか、遊び、保育の意味を保育者が保護者に伝えていくことがコミュニケーションにつながる。②「子育てが困難な親との手つなぎをどうするか」では、子育てに無関心な親を子どもに愛情がないと決めつけず、話しやすい話題を持ちかけて気楽に話せる雰囲気作りをする、ということでした。保護者の方と接する際、私たち保育士は、保護者の思いに気づき、寄り添い、心を通わせることが大切であり、そのことが保護者との繋がりになり、安心感となっていくのだと改めて思いました。



第4-2分科会 保護者に対する支援を考える「地域における子育て支援」に参加して

北条みどり保育園 松本八千代

実践研究発表では、「会津の子育てを考える―地域に根ざした子育て支援の創造―」の研究テーマの基、家庭保育における子育て支援の実態、ニーズを把握しその結果から見えてきた親子の姿を見据え親子のニーズに即した利用者主体の子育て支援を考える発表と、「保護者が求める子育て支援のあり方」のテーマの基、子育て支援の取り組みが多様化する中、保護者が何を求めて来ているのか、行なっている支援は、保護者が求めている支援なのかをアンケートをもとに、今後の子育て広場の展開を考えた発表がされました。職員間の連携を図りながら、保護者が求めている関わりを把握し、利用ニーズにそった対応をされている日々の努力と地域に根ざした子育て支援への熱い思いを感じました。

午後、小グループに分かれ子育て支援のPRポスターを作成しました。各グループが意見、アイデアを出し合い趣向を凝らした素敵なポスターができあがり、人となつた。全てのポスターから、人となつた。つなぐ「笑顔」を大切にしたい思いが伝わってきました。

参加者一人一人の出会いがある有意義な時間を過ごし、参加者で作成された分科会となったと思います。

地域に根ざした保育園をめざし更なる努力をしていくことを確認し閉会しました。



第5分科会 職員の資質向上をはかる「専門職としての責務や研修等」に参加して

かんろ保育園 湊 博美

職員の資質向上を図る「専門職

てもらう為の啓発をしていくことが大切である。男性保育士に子育て支援の場に入ってもらうことで、父親を巻きこんだ子育て支援活動の原動力になると男性保育士の存在の大きさにもふれられました。又、子育て支援は、出会い、ふれあい、学びあい、支えあつてつなごうと、学ばせようとする、保育園が行なう地域の子育て支援の重要性を再確認しました。

午後、小グループに分かれ子育て支援のPRポスターを作成しました。各グループが意見、アイデアを出し合い趣向を凝らした素敵なポスターができあがり、人となつた。全てのポスターから、人となつた。つなぐ「笑顔」を大切にしたい思いが伝わってきました。

参加者一人一人の出会いがある有意義な時間を過ごし、参加者で作成された分科会となったと思います。

地域に根ざした保育園をめざし更なる努力をしていくことを確認し閉会しました。

としての責務や研修など」研究1街の中の子育て文化センターをめざして「地域の人たちとのつながり」は豊かな子育て文化につながることをテーマに東京都荻窪北保育園の報告では、子どもの成長、発達を大らかに見守り、保育園が核となつて子育て文化を地域に育む取り組み（年長児の米作り等）を振り返りながら地域との協力・共同の関わりを進める中で子ども達と共に「もえぎ公園田んぼ」を復活させた活動でした。前年の年長児がレンゲの種をまき花が咲き、お父さんやお母さんと田んぼに土運び、水入れをして作り上げた田んぼ。田植え、稲刈り、案山子づくりや収穫祭などお米ができるまでの体験は奥が深く、信頼できる保護者のもとでも言える保育者集団の中、伸び伸びと思ふ存分保育ができ自分の良さを十分発揮しながら地域の力をしっかりと受けた子育て文化のつながりや共有の具体化の報告でした。

特別分科会 自由発表に参加して

ひばり保育園 佐藤比登志

「森の保育」の観察記録や保育士のワークショップで得られたデータをもとにまとめた研究について、発表⑦では、排泄の自立に向けてのメカニズムの学習や新たな記録表作りなどを分析した研究について、発表⑧では、探索活動の発達する1歳児を取り上げ、絵本の読み聞かせからそれを見立て遊びへと展開し、イメージの表現活動に結び付けるまでの一連の保育について、発表⑨では、自己肯定感が育つ保育のあり方やその手立てを探る方法としていろいろな場面に於ける葛藤体験について、発表⑩では、3歳までの保育の重要性について、トイレトレーニングの例を挙げて説明するなど、それぞれ発表されました。それぞれの保育園において、納得できる保育を捜し求めておられ、今までの自分にはない発見や示唆を得ることができました。

特別分科会では、保育や子育て支援に関する内容で自由にテーマを設定して発表する10題の実践発表があり、熱心に意見交換がなされました。発表①では、家庭に求められる保育士の役割が多様化するなか、各家庭に合わせた支援について、発表②では、絵本の読み聞かせや人形劇を通じ、表現の楽しさを伝えると同時に、子どもたちのつぶやきや生活経験から作成された「子どもたちに伝えたいこと」を課題として含めた園独自の創作話（人形劇）への取り組みについて、発表③では、自然の中で得られる素晴らしい体験を通して感性や思いやりの心が大きく育つことについて、発表④では、防災ガイドラインの作成までの過程及びその内容とその結果もたらされた職員間における相互作用について、発表⑤では、乳児担当の課題を整理し、子供の発達特徴を理解するとともに、一人ひとりの個性・あそび・生活リズムを工夫・見直しすることで、子どもたちがより安定して過ごせるようになった事例について、発表⑥では、



初任・初級保育士研修会③に参加して

あゆみ保育園 村岡 亜樹

初任・初級保育士研修会③が、平成24年11月7日（水）倉吉未来中心「セミナールーム3」にて開催されました。今回の研修は、研修①（保育現場実習）、研修②（船上山研修）を終

えてその後、現場に帰ってからの丁寧な取り組みを行ったか、どんな意識変化があったか、について報告をしい、また日々の課題や問題点等について話し合いを持ち、今後につなげるまとめの会として開かれたものです。

参加者は38名で、約5ヶ月ぶりの再会を喜びながら、活発に討議が進められました。

参加者の方々は、研修①②終了後、心がけていること、困っていること等について800字程度の原稿をあらかじめ提出していただき、その中から3名の方に発表をしていただきました。

一つ一つの発表ごとに行なわれたグループ討議では、「個を大切にしよう」という視点から

①この子はなぜこんなことをしているのだろうかというエピソードを話し合ってみよう。

②出したエピソードを基に、どうしたら個々が活動に入れるようになるか考えてみよう。

③環境構成で工夫していることをそれぞれ挙げてみよう。

④今話し合ったことを自園に持ち帰って活動を展開するにはどうしたらよいか。

の4つのテーマに沿って話し合いが進められました。

参加者からは、「研修で学んだ内容を園に持ち帰ったところ、できる形で取り入れてみようという事になり、新たな保育体制での実践を始めている」という報告や、「子どもたちと向き合う上での意識は変わったが、園の体制上、できにくい状況にあるのも現実で、もどかしさを感じている」といった苦悩、また「職員同士が仲良く、でも報告・連絡・相談を徹底させ、保育士間の連携を密にすること。」

今回の研修は、研修①（保育現場実習）、研修②（船上山研修）を終

今回の研修は、研修①（保育現場実習）、研修②（船上山研修）を終

今回の研修は、研修①（保育現場実習）、研修②（船上山研修）を終

今回の研修は、研修①（保育現場実習）、研修②（船上山研修）を終

子どもの成長を全職員で共有することが大切である」などの意見が挙げられていました。

最後に山本青年部会副部長より、「何故できないんだらう?何であの子は:それを受けとめるのが個性を認めることである。保育士とは自分の持っているものがトータルで反映されるのがプロである。保育士の引き出しは自然に貯まるものではないので、貯める努力を共にしていきましょう!」と激励の言葉で締めくくられ、閉会しました。



第2回乳児保育研修会に参加して

若桜保育所 小林 宏美

第2回乳児保育研修会が平成24年11月10日(土)に福祉人材研修センター、翌11日(日)にはふれあいの里に於いて開催されました。講師に幼児教育者 藤田浩子氏をお迎えして「おはなしとわらべうた」のテーマで講演していただきました。昨年に続き藤田先生の講

演を今年も聞けるとの思いで「また、是非聴いてみたい」「この日を楽しみにしてました。」などの声を参加者の方から聞くことができ、今年も開催できたことをうれしく思いました。

先生は、テーマのとおりわらべ歌を実際に歌いながらの実演と子ども達の日々の生活や遊びにわらべ歌がどのようにつながっていくのか、子どもの心に寄り添う歌であるということが話されました。私がまず感じたことは、先生の歌声はなんと心地よく私たちの耳にすーと入ってくるということでした。声は高めに、歌う人の表情が穏やかであること。あーという間に先生の歌声に引き込まれていきました。きつと、わらべ歌の良さなこういふところにあるんだろなと感心させられました。

そして、先生はこのようにお話されました。最近よく泣き止まない赤ちゃんが多い:と。園生活の中でも、家庭の中でも泣き止まない姿は見られるものです。泣くの

にもちゃんと理由があり、赤ちゃん自身が要求を訴えていることには変わりありません。が、赤ちゃんのちょっとした気分を変える手段として、わらべ歌であやすことを教えていただきました。そこで、今の季節に合う「秋の遊び歌」を紹介されました。あがりめはきつねのめ:は、赤ちゃんの顔に触れて歌いながら、上がり目や下がり目をして表情が変わっていきます。

最後のねずみの歌のところ、で、「チュウチュウチュウチュウ」と体を触ってくすぐっていきます。そのうちに泣いていた子も自然に笑顔になって笑い声に変わっていった実践例です。その光景を思い浮かべると、本当にそうなんだろな、と思ってしまう。まさに赤ちゃんの今の気分を変えてやること、気分転換してやれるような技を私たち保育者が持つことも大切であると感じました。また、歌う人の心が落ち着き穏やかにならないと、歌をおして伝えられないのかな:とも強く感じてしまいました。

いきました。もちろん仕事では、保育園での読み聞かせをしているのですが、家では、自分の子どもたちと一緒に絵本を見るのが楽しみでした。二人の子どもも違っていました。長男は、怖いと思った絵本を二度と読まないで、と頼んでいました。次男は、ポロポロになるまで同じ絵本を私たちが夫婦に読ませました。大人にとっては、あまりびんとこない内容の絵本が、子どもにとっては、とても大好きな絵本であったりします。私の好きな絵本であつたりします。本屋さんから届けてもらっていただくことは、よかったです。

私の夢

宇田川保育園 山本 由美

私の家には、今、月刊誌も含めると、絵本が900冊ほどあります。それに児童書を合わせると、1000冊は越えています。これは、多いのか少ないのかかわからないのですが、二人の子どものために、まだ小さかった頃から少しずつ増え続けています。このようになりました。子どもたちが小さい頃、本屋さんから毎月年齢に合わせた絵本をそれぞれに届けてもらっていました。絵本が届くのを一番楽しみにしていたのは、子どもよりも私だったのかもしれない。それに加え、月刊絵本をとっていた時期もあり、多いときは、月に4冊ずつのペースで絵本が増えて

次男が小学校六年生の時に、学校から読み聞かせのボランティアの募集の手紙が届きました。月に一回、朝の十分間各クラスで読み聞かせを行うというものでした。これなら私にもできるかと思いい、説明会に参加してみました。そこから読み聞かせのボランティアがスタートしました。私の場合、図

書館で絵本を選ぶことはほとんどなく、自分の家の本棚を見ながら「今回は五年生だから、これにしようかな」と、選んでいます。真剣にお話を聞いてくれる小学生。読み終わったあと、私のほうが嬉しくなってしまう。と心がから言いたくなります。子どもが中学生になった時も、児童書などいろいろな本が届いていました。もちろん、もう子どもだけで本を読むことはできるので、夜、一冊本を選んで、それを子どもと交代で一ページずつ声に出して読んでいました。(途中で眠ってしまうことも:))今ではもう、大学生と高校生になった子どもたち。私にとって絵本は、子どもたちとの思い出の中で、大きなものとなっていきます。今は、家の絵本を時々保育園に持って行って、子どもたちと絵本の世界を一緒に楽しんでいます。将来は、孫や近所の子どもたちとも楽しめるようになっていたら、どんなに幸せだろうと思っています。



その他にもたくさん遊びわらべ歌を歌って教えていただきました。先生の尽きないわらべ歌や話の時間は、本当に早く、まだまだ聴いていたいな:と思えるくらいでした。会場の皆さんと一緒にわらべ歌を歌ったり、時には笑い声が響き渡ったりの楽しい時を過ごすことができました。今後自分のスキルを磨いていくためにも、このような研修に参加し保育者としての専門技術を保育の場で生かせるようにしていきたいと思えました。

あそびうたグループ紹介

明日からまたがんばろう

キッチンバンド

鳥取県は言わずと知れたあそびうたの宝庫。かの中川ひろたか氏は、主催するA1あそびうたグループで「鳥取はあそびうたのりパプールだ」と賛辞を送ったとか。今回は鳥取県東部を中心に活動を展開している男性3人組「キッチンバンド」のギター担当、稲村有史さん(以下、I)にお話を聞きました。



I よろしくお願ひします。お断りしておかなければなりません。僕たちいわゆるあそびうたグループではないのですがよろしいですか?
I え?幅広く活動されている事は知っていました。子ども向けのコンサート等でよく名前を拝見していたので、つまりあそびうたを中心に演奏されているのだと思っていました。

I あそびうたと言える曲は1曲しか持っていないんです(笑)失礼いたしました(笑)。では一体どのようなジャンルで...?
I うーん、ジャンルというかコンセプトとしては、いかに笑ってもらえるか、というところでしょうか。保育園に呼んでいただくこともあり、企業が、企業のイベントやお寺、ライブハウス、地区の婦人会、敬老会等、年齢、場所を問わず誰が見ても楽しめるステージを目指しています。その他では県の文化交流事業でロシアのウラジオストクへ行かせて頂いたりもしました。

I それはすこい。しかしキッチンバンドさんのステージを拝見すると、演奏以外のいわゆるMCの部分にも魅力を感じてしまうのですが、ロシアでは言葉が通じませんか?どうされたのですか?
I シャベくってきましたよ。ロシア語で。
I いやいや、身振り手振りとお少し英語を織り交ぜながら通じましたか?(笑)
I どうでしょう(笑)(謙遜されていますが、会場の皆がキッチンバンドに感動したと、地元新聞で報じられていました)ステージ上でのユニークな演出はどなたのアイデアなのですか?
I 全部僕が考えます。で、他の



メンバーにこうしてねと。その日演奏する曲目は会場の雰囲気を見ながらステージ上でアドリブ的に決めていくのですが、演出の打ち合わせだけではしっかりやりません。

曲の打ち合わせはなし。そうですね。僕がギターで最初のコードを鳴らしたら、メンバーが次はこの曲かと阿吽の呼吸で入ってくるような。職人技ですね。稲村さんはギター教室「PEACE FLAG」でギターを教えていらっしゃるそうですが、相当長くギターをされているのですか？

いや、遅いくらいです。僕は今32歳ですが、始めたのは20歳を過ぎてからなので。今も週一で大阪の師匠のところへレッスンを受けて行っていますよ。

ギター教室の先生にも師匠がいられるのですか。まだまだです(笑)

教室へはどのような生徒さんが通われていますか？

小さな子どもさんから高齢の方まで。以前は80歳の生徒さんもいらっしやいましたよ。80歳！そのお歳でギターを習おうというバイタリティがすごい。

ただその生徒さんはどちらかと言えば、話に来たという感じで(笑)。その他では現役の保育士さんも多いですね。童謡ってピアノ譜しかないものが多いから、それをギター用に直したり、ここでこんなリズムを入れたらおもしろいよね、というアドバイスのなども出来たりしますし。なるほど。私も通いたくなってきました。ところで話をバンドの方へ戻しますが、キッ



ありがとうございます。全4回にわたり県内のあそびうたグループを紹介してきた本連載も今回がいよいよ最終回となりました。取材依頼に快く応じて下さった各バンドの皆さん、本当にありがとうございました。

素敵だと思います。今日は長時間ありがとうございます。今日もCDも製作中とのこと、発表されるのを楽しみにしています。

そうですね。明日からまたがんばろう！という気持ちで帰ってみたいという思いが全てですね。

チンバンドというバンド名はどこからきているのですか？僕たちはキッチンドラムと呼んでいるのですが、バンドで使っているドラムセットをポリアケツやフライパン、蓋付きの鍋、ボウル、ステンレス製のトレイ、一斗缶などの台所用品で組み立てているんです。それでキッチンバンドと。

平成 25 年度 研修 等 計 画

事業名	期 日	場 所	備 考
代議員会	平成24年 5 月22日(水)	米子市 米子コンベンションセンター	
施設長研修会	平成24年 5 月22日(水)	米子市 米子コンベンションセンター	
第56回全国私立保育園研究大会	平成25年 6 月 5 日(水)～ 7 日(金)	宮崎県	全国私立保育園連盟
第 1 回保育士研修会	平成25年 6 月 8 日(土)	倉吉市 倉吉未来中心	
第 1 回合同部会	平成25年 6 月12日(水)	倉吉市 倉吉未来中心	
第 1 回障がい児保育研修会	平成25年 6 月15日(土)	鳥取市 福祉人材研修センター	
	平成25年 6 月23日(日)	米子市 ふれあいの里	
主任保育士研修会	平成25年 6 月29日(土)	倉吉市 倉吉未来中心	
第59回中国地区保育研究大会	平成25年 7 月 4 日(木)～ 5 日(金)	島根県松江市	全国保育協議会
第 1 回食育研修会	平成25年 7 月 6 日(土)	倉吉市 倉吉未来中心	
第 1 回乳児保育研修会	平成25年 7 月13日(土)	米子市 ふれあいの里	
	平成25年 7 月14日(日)	鳥取市 福祉人材研修センター	
初任・初級保育士研修会①	平成25年 7 月24日(水)	三朝町 三徳山 皆成院	
第 2 回障がい児保育研修会	平成25年 8 月10日(土)	米子市 ふれあいの里	
	平成25年 8 月11日(日)	鳥取市 福祉人材研修センター	
第 2 回保育士研修会	平成25年 9 月 7 日(土)	倉吉市 倉吉未来中心	
第57回全国保育研究大会	平成25年10月 9 日(水)～11日(金)	愛知県名古屋市	全国保育協議会
創立50周年式典	平成25年10月21日(月)～22日(火)	東京都	日本保育協会
第33回青年会議全国大会	平成25年10月29日(火)～30日(水)	茨城県	全国私立保育園連盟
初任・初級保育士研修会②	平成25年10月16日(水)	県内保育所	
初任・初級保育士研修会③	平成25年10月17日(木)	倉吉市 倉吉未来中心	
第 2 回乳児保育研修会	平成25年11月 2 日(土)	鳥取市 福祉人材研修センター	
	平成25年11月 3 日(日)	米子市 米子全日空ホテル	
第47回全国保育士会研究大会	平成25年11月 7 日(木)～8日(金)	岩手県盛岡市	全国保育士会
第 2 回食育研修会	平成25年11月16日(土)	鳥取市 福祉人材研修センター	
	平成25年11月17日(日)	米子市	
第35回全国青年保育者会議	平成25年11月20日(水)～22日(金)	福井県	日本保育協会
第61回鳥取県保育推進研究大会	平成26年 1 月19日(日)	倉吉市 倉吉未来中心	
第39回保育総合研修会	平成26年 1 月29日(水)～31日(金)	兵庫県神戸市	全国私立保育園連盟

※期日及び内容等については、変更となる可能性がありますので御了承ください。

今年を振り返ると、いろいろと大変な年だった。でも、いろいろな経験が積み重なって、来年はもっと頑張りたい。という気持ちで、日々頑張りたい。

雪が少なく、園庭で遊ぶ元気な子どもたち。園長先生の声も響いている。長い冬休みも、楽しんで過ごした。先生は、子どもたちの成長を喜び、来年も頑張りたい。

新年を迎え、あつあつな気持ちで、仕事に取りかかろう。今年も、いろいろな経験が積み重なって、来年はもっと頑張りたい。

